木下順二評論集 9

木下順二評論集

1956~1957年

4

未来社刊

木下順二評論集　4　【全一〇巻】
一九七四年五月一日　第一刷発行

定価一二〇〇円
©著者／木下順二
発行者／西谷能雄
発行所／株式会社未来社
東京都文京区小石川三の七
電話(八一四)五五三一＝代表
振替東京八七三八五番
本文印刷＝新協印刷
装本印刷＝形成社
製本＝今泉誠文社

落丁・乱丁本には責任を負います　検印廃止

凡例

一、本評論集全八巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理される。

Ⅰ　主として演劇一般について
Ⅱ　主として自作について
Ⅲ　主として演劇外の問題について
Ⅳ　（以上を〃自〃に即してのものとすれば）主として〃他〃について
Ⅴ　主としてシェイクスピアのこと
Ⅵ　その他（あるいは主として馬について）

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』（中央公論社、一九五九年、未来社、一九六七年）、『ドラマとの対話』（講談社、一九六八年）及び『随想シェイクスピア』（筑摩書房、一九六九年）は、本評論集に収録しない。

一、本評論集は全八巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻　一九三五年から五〇年まで
第2巻　一九五一年から五三年まで
第3巻　一九五四年から五六年まで
第4巻　一九五七年から五九年まで

第3巻　一九五四年から五五年まで
第4巻　一九五六年から五七年まで
第5巻　一九五八年から五九年まで
第6巻　一九六〇年から六一年まで
第7巻　一九六一年
第8巻　一九六二年から六四年まで
第9巻　一九六五年から六七年まで
第10巻　一九六八年から七〇年まで

一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他で不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。

一、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集　菅井　幸雄
　　松本　昌次

＊おことわり　紙数の都合上、当初は全8巻の予定でしたが2巻増え、全10巻となります。ご諒承下さい。（編者）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

木下順二評論集 4

目次

凡例

I

日本演劇の諸問題――モスクワで、一九五五年に……一
シングを楽しんでいる……三七
日本の新劇……三九
アラン島――「心願の国」のシングと方言と……四二
「文学」編集後記……五七
京劇の初公演をみて……六〇
京劇・東京公演を見て……六三
詩劇の流行……六六
梅蘭芳を支えるもの――京劇代表団と語る……六九
演劇と人間性……七五
民話と民話劇について……八〇
世界の中の日本演劇……八九
欧州古典劇から新劇が学ぶ前に……九三
創造の精神……九六
イギリスで見た芝居……九八

能楽について……一〇一
「新劇」扉のことば……一〇三
戯曲を書くという仕事……一〇五
第三の季節……一〇七
「上から」の戯曲と「下から」の戯曲……一一一
崇高なる商売……一一九
私の読者……一二一

II

『三年寝太郎』の作者から……一二七
『二十二夜待ち』の思い出……一三〇
『おもん藤太』の作者から……一三三
『彦市ばなし』の作者から……一三五
『演劇の伝統と民話』――「はじめに」……一三七
狂言『彦市ばなし』……一四〇
『夕鶴』のせりふ……一四三
新春におもう……一四六
『暗い火花』のこと……一四七

『明日を紡ぐ娘たち』のこと……一五〇
民話と民話劇……一五四
書斎のこと……一五八
日本人のドラマトゥルギーを……一六三
詩劇について……一六六
原作者の言葉……一六八

Ⅲ

使節団をおくる……一七三
大衆と専門家との合作……一七五
歓迎中国訪日京劇代表団……一七八
成長した地元民……一八二
夏に考えたこと——銷夏報告……一八四
写真に撮れない凄惨さ……一八九
砂川の学生たち……一九一
一九五六・一〇・一三—砂川……一九四
『芸術と社会への眼』——「おわりに」……二三〇
味覚と人格との関係について……二三二

山村で……二三六
チップ……二三〇

Ⅳ

報告・「現在の朝鮮文学」について……二三五
パリのロルカ……二四一
安英さんのこと……二四六
ねばり強く生きるために……二四七
大橋喜一のこと……二四八
畑中武夫・『宇宙と星』――その書評にならない読後感……二五一
岸田氏の遺されたもの……二五五
尾島庄太郎・『現代アイァランド文学研究』……二六一
人形座公演にあたって……二六二
『世界芸術論大系』推薦……二六四
ある本のはじめに……二六五
推薦する本……二六八
山代巴・『荷車の歌』……二七〇
『歌舞伎全書』推薦のことば……二七三

平凡さの魅力 …… 二七四
ある『日本古典文学大系』 …… 二七七
はかなさを感じさせる絵画 …… 二八〇
西尾実・『日本人のことば』 …… 二八三
写楽の世界 …… 二八六

V

モスクワのシェイクスピア …… 二九五
映画『オセロ』を見て …… 二九七
モスクワの『十二夜』 …… 二九九
オセロー …… 三〇二
シェイクスピア …… 三〇四

VI（ココニ該当スル文章ハコノ時期ニハナイ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

日本演劇の諸問題

――モスクワで、一九五五年に――

前おき

ものものしい題名だが、これは私がモスクワでやった講演の原稿である。私をソヴィエトへ招いてくれたヴォクス（全ソ同盟対外文化連絡協会）から、日本演劇について一時間の講演をしてほしいという依頼が、モスクワに着いた時にあった。外国で講演というと、大抵例外なく原稿を準備してそれを読む。日本のように手ぶらで勝手なことをしゃべるというのは、西、東、いずれでもあまり見かけないようだ。そこで私も原稿を準備することになったわけだが、なにしろ毎日、たとえば午前にオスタンキン演劇博物館を見る、午後はスタニスラーフスキー住宅博物館を見る、そして夜は芸術座のチェホフを見てそれが終るのが、夜中近く。それからホテルに帰って通訳諸氏とゆっくり晩飯を食い、風呂にはいって寝るのが時によると二時近くになる。その上私の部屋の窓は、幅百メートルもあるかと思える大通りを越してレーニン博物館と向いあっていたが、その大通りを、朝五時カッキリに、重タンクのように大きな撒水自動車が、

ものすごい音をたててシャーッと水をまいて通り、その頃からぼう大な交通量のたえまない活動がはじまって到底寝てなんかいられない。つまり睡眠時間が連日三、四時間になる。

全くの余談だが、それでは晩飯を急いで食って、風呂なんかはいらないで寝ればいいじゃないかといわれそうだが、風呂のほうはまあそうだが、飯のほうは絶対に急いで食うというわけに行かない。東西を通じて、飯はゆっくり食うものなのである。飯を急いで食うのは、私の見た限りでは、どうも世界中で日本だけのようだ。一番それが徹底しているのはパリで、パリの芝居はみんな夜の九時にあく。理由はどうも、飯をゆっくり楽しんで食うためのようだ。芝居は芝居で十分楽しむが、そのことのために晩飯を十分楽しんで食う楽しみを犠牲にすることは決してしない。日本のように、今晩おれは芝居を見るんだから飯なんかどうでもいいやと、一目散に劇場へかけつける悲壮な精神は、どうも外国では見うけられないようである。パリで戦後初めて、全く例外的にヴァーグナーのオペラが六時あきだったが、飯を食うための幕間（マクアイと発音して下さい。近頃マクマ、マクマというのを聞くが、あれは本来の読み方ではないと思う）がちゃんと一時間とってある。ちょうど中村光夫さんといっしょになって、飯を食いに外へ出たが、中村さん曰く、「どうもおれもだんだんパリ染みて来て、一時間じゃ飯の時間にゃたりないって思うようになって来たよ」。こないだ日仏合作映画を長崎でとっていて、そこから帰って来た伊藤熹朔さんが、ほとんど目をむいて私に話されたことには、何日も雨が降り続いてロケはお天気待ちだった。ある日急に晴れて太陽が出た。それっというので押し出そうとしたら、フランス人たちは昼飯を食っている。今は食事の時間だからと、実に悠々と飯

を食っているうちに陽はまたかげってしまった――かどうか、そこまでは私は聞きもらしたが、とにかくおどろいたねえという伊藤さんの話だった。

下らん余談のように聞こえるかも知れないが、こういうところにも日本の演劇のある性格を論じる手がかりはあるかと思うのだけれども、今は立ち入らない。

そこでもとに戻って、とにかくそういうわけで、原稿を書いている時間がない上に、からだはくたくたになる。そこで日本人係りのスタルシーノフ君をつかまえては、これは基本的人権の問題ですよ、何とかしてくれなきゃぼくはノビちまうと、会うたんびにジョウダンまじりのモンクをいった。スタさんはスタさんで頭を抱えて、とにかくホテルがどこもここも満員なんで、もう少し待って下さい、もう少し、というわけで、やっと最後の一週間ぐらい、静かなところへ移してもらうことができ、そこで芝居以外の見物をカットして二日ばかり部屋にこもって原稿を書いた。書いているとスタさんがさいそくにやってくる。早くして下さいよ。翻訳が間に合いません。何枚ですか？　私が答えて五十枚。五十枚？　長すぎます。いいえ長すぎない。日本語の四百字一枚は、早く読むと一分です。一時間しゃべるんだから五十枚がちょうどいいんです。しかしそんなに長いと翻訳が間に合わない。誰が翻訳するんですか？　わたくしがします。じゃぼくが協力しますよ。尤もぼくはロシヤ語はひとともわからないけれど。――

結局しかし、三十数枚になった。翻訳は間に合わないので三人の通訳氏が分担ということになった。その一人のミクーシュキン君という愉快な青年、といってもヒゲをはやして頭はやや禿げているのだが、十枚分ほどの私の原稿をにぎって、私を博物館や劇場へ案内しながら、自

動車の中でも芝居の幕間でも常に訳し続けている。そして曰く、「あなたはこの文章の作者でしょう？　作者と共にあるならば、いかなる字引を横に置いておくよりも正確な翻訳ができます」

ミクさんそれは少々合理化だねと私は冷やかしたが、事実そうでもするより時間がなかった。尤もミクさんを見ていると、翻訳をするのは勤務時間の間だけで、それを家に持って帰ってやるとか、まして徹夜してやるということは一切しないようだった。そしてはた目でもはらはらするほどもう時間もなくなっていても、晩飯は私といっしょに、実に悠々と楽しんで食べた。

どうもいらんことばかり書いてしまったようだが、むろん翻訳はちゃんと間にあい、一九五五年九月二十三日の晩、モスクワ科学アカデミー東洋研究所主催によって、同研究所の古ぼけた一室で無事講演会は行われた。司会は歴史学のアヴジェフ博士。聴衆約五十人。しゃべる形式は、長い講演はこれがどこでも普通だが、私が最初の一枚分ほどを読むと、あと全文を通訳（ミクーシュキン君）が読み、最後の一枚分ほどをまた私が読み、それを通訳し、そして質疑応答になる。

主催者の名称を講演の直前に聞いて、そして会場へ行ってなるほどそうだったなと思ったのだが、原稿を準備している時、私はモスクワの演劇人に報告をするつもりでいた。ところが集まって話を聞いてくれた人たちは、演劇人ではなく、いわゆる日本学の学者だった。しかもその日本学の学者たちは実に日本のことを知っていて、「あなたの私小説の見方はちょっと軽過ぎやしませんか。もっと私小説を重視する必要があるんじゃないですか。たとえば宮本百合子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com